W-1　レキシコンの輪郭：派生の領域とインターフェイス

［ワークショップの趣旨］

生成文法研究において、シンタクスが語と語の併合を司る分野であるとの認識は、その素朴な推論として、語がシンタクスのインプットになるという語彙主義的な言語観を醸成してきた。一方、Hale and Keyser (1993) 等の統語的な動詞の意味分析や Halle and Marantz (1993) 以降の分散形態論の発展に伴い、語が持つ意味情報は統語構造における主要部やその投射の反映であるとする反語彙主義の考え方が注目され、語彙主義に基づく過去の研究が新たな視点で見直され続けている。

このような語彙主義と反語彙主義による 30 年来の議論を踏まえ、本ワークショップでは、言語の理論的研究においてレキシコンがどのように扱われるべきかという問いに様々な角度からアプローチすることを目的とする。具体的には、日本語と英語を中心に、項の具現化、構文交替、動詞の意味拡張、複合語形成、語の音声的具現（異形態の出現）などの事例を通して、言語における派生の領域およびレキシコンと他分野とのインターフェイスについて、いくつかの理論的示唆を与えることを試みる。各発表が依拠する理論的枠組みも、概念意味論、分散形態論、形式意味論と多岐にわたるので、各発表での問題提起に対するフロアからの意見やディスカッションを通して、生成文法研究におけるレキシコンの在り方について、問題意識の共有と理解の深化を図りたい。

［ワークショップの構成］

1. 趣旨説明（5 分）
2. 口頭発表（30 分）×3 件
3. 質疑応答および全体討論（25 分）

［各発表の題目と要旨］

第一発表　意味合成の領域とレキシコンからシンタクスへの写像　　工藤　和也（龍谷大学）

本発表では、(1a)のような英語の使役化構文と(1b)のような日本語の語彙的複合動詞を例に、動詞の意味合成には意味構造で行われるものと統語構造で行われるものの 2 種類があることを主張し、さらに、(2)のような英語の場所格交替の例から、意味構造に存在する語彙情報が統語構造に反映されない場合があることを論じる。

(1)　a. The professor laughed the student out of the room.　　b. 太郎は花子と同じ電車に乗り合わせた。

(2)　a. John loaded the hay onto the wagon.　　b. John loaded the wagon (with the hay).

「笑う」と「(部屋を)出ていく」の 2 つの下位事象から成る(1a)は、参与する 2 項（教授と学生）との兼ね合いで論理的には複数の解釈が可能なはずだが、実際には「教授が笑い、（それが原因で）学生が出て行った」という解釈しかない。本発表では、自然言語の可能な動詞句の構成が v(ACT)-v(CAUSE)-V(MOVE/BECOME)に限られる(Fujita 1996)と仮定し、上記の例では意味構造上可能な解釈をシンタクスが制限していると説明する。これにより、*The teacher laughed the students.（「学生を笑わせた」の意味）のような非能格動詞の使役化が不可能なことや、*The vase broke worthless.のような 2 つ以上の異なる結果叙述の禁止 (Goldberg 1995) も、実は統語構造上の制約として処理できることが示される。

一方、反語彙主義の立場では、日本語のいわゆる「語彙的」複合動詞の主語は、統語的に後項動詞 (V2) に由来すると考えられてきた（藤田・松本 2005）が、(1b)の主語は意味的に前項動詞 (V1) に由来するとしか考えられない（松本 1998、影山 2013）。さらに、分散形態論では、「語彙的」複合動詞の V1 と V2 を主要部の段階で結合し、複合動詞として新たな主要部を形成するという構造（= [$_v$ V1＋V2]）が提案されている（斎藤 2015）が、これでは複合動詞全体の主要部を決めることはできず、V1 と V2 の項関係も捉えられない。このように、日本語の語彙的複合動詞を完全にシンタクスで派生するにはクリアしなければならない様々な問題が残されている。このことから、本発表では、レキシコンとシンタクスはどちらも独自の生成能力を有する別個の文法モジュールと考えるほうが、言語理論としての説明的妥当性が高いと主張する。

さらに、(2)の場所格交替では、意味的に「動作主の行為」、「主題の移動」、「場所の状態変化」の 3 つの下位事象が関わっている（Beavers 2006）が、(2a)は「主題の移動」に、(2b)は「場所の状態変化」に意味的な焦点が当てられており（岸本 2001）、それぞれの下位事象にかかわる項のみが表層の文法関係を決定している。このことから、本発表では、レキシコンはシンタクスよりも構造的に複雑であり、したがって、前者から後者への写像は全射的 (surjective) になることを Pustejovsky (1995) の生成語彙論の枠組みを用いて説明する。

第二発表　分散形態論と語彙的 V-V 複合語の意味構成　　田中　秀治（三重大学）

本発表では、「語形成は全て統語部門で行われる」という分散形態論のテーゼ (Halle and Marantz 1993) にとって潜在的に問題となる「日本語 V-V 複合語」に着目する。影山 (1993) は、V-V 複合語を「統語部門で作る統語的 V-V」と「レキシコンで作る語彙的 V-V」に分類する。この根拠は、例えば(1)の「動名詞＋する（VN-*s*）」の挿入可能性の違いにある。

(1)　a. 統語的 V-V：✓ 庭の木を 切断し始めた。（cf. ✓ 庭の木を 切り始めた）

　　b. 語彙的 V-V：＊ 庭の木を 切断し取った。（cf. ✓ 庭の木を 切り取った）

つまり、(1b)で VN-*s* を挿入できないという事実は、「VN-*s* が統語部門で作られる句である」と仮定すれば「レキシコンで作る語彙的 V-V の一部には使えない」という説明が与えられる。よって、この影山の説明が正しければ、(1b)の非文法性は、「レキシコンでの語形成の必要性」を示しており、分散形態論のテーゼにとって経験的に問題となる可能性がある。

以上の問題に関して、本発表は、分散形態論の枠組みでも「構成意味論」の視点を加えれば(1b)の非文法性を捉えられることを示す。まず、語彙的 V-V の統語構造としては、Embick and Marantz (2008) の「ルート範疇化仮説」を採用し、かつ、Kratzer (1996)の Voice 主要部を仮定しながら、(2)の構造を提案する。

(2)　「NP を切り取る」の統語構造：$[_{\text{VoiceP}}\ [_{v\text{P}}\ \text{NP-}o\ [_{v'}\ [_{v\text{P}}\ [_{v'}\ \sqrt{\text{KIR-}}\ v_{\text{C}}\ ]\ \sqrt{\text{TOR-}}\ ]\ v\ ]\ \text{Voice}\ ]$

この構造では、V_1とV_2が範疇未指定のルート（√）で、機能範疇 *v* の局所領域の中で動詞化するという仮定に加えて、「複合ルートを作り出す verbal compounder v_{C}」という種類の *v* を導入しており、V_1の連用形語尾（田川 2009）が v_{C} の表れとして分析できるようになっている。ここで重要なのは、v_{C} の意味タイプである。具体的には、Kratzer (1996) などの事象意味論で仮定される *e* (individual)、*v* (event)、*t* (truth value) に加え、*r* (root) という基本意味タイプを仮定し、v_{C} の意味タイプが $\langle r, \langle r, r\rangle\rangle$ であると提案する。これはつまり、v_{C} が先にルート要素と併合することを求めるため、(1b)のように VN-*s* のような非ルート要素が挿入できないことを説明する。このように、本発表の意義は「語彙的 V-V 複合語の特性は、分散形態論のテーゼに対する絶対的な反例ではない」ことを示すという点にある。さらに、本発表では、同様の分析により、他の語彙的 V-V を「統語的」に派生する可能性についても検討する。

第三発表　語彙層を超えた異形態：日本語の数詞からの試案　　依田　悠介（東洋学園大学）

本発表では、「語彙層」の決定に関するメカニズムを考察することにより、「レキシコン」で計算されるべき素性について検討する。これまで「語彙層」は Ito and Mester (2009) をはじめとして、音韻論の問題として捉えられてきた。本研究では、「語彙層」を音とは独立した「レキシコンと統語」における問題と再解釈し、分散形態論の観点から再検討する。

本発表では主に(1)のような日本語の数量表現のデータを観察する。日本語は助数詞を用いる言語であり、数量を表す表現は「数詞＋助数詞」のユニットで出現するが、特に数量が「1」または「2」の場合の音形は、基本的に助数詞が和語系であれば和語で出現し、漢語系であれば漢語で出現する。

(1)　a.【和語系助数詞】{ひと・ふた/*~??いち・に} –{品/sina/・棟/mune/・皿/sara/・鉢/hachi/..}

　　b.【漢語系助数詞】{*~??ひと・ふた/いち・に} –{輪/rin/・段/dan/・個/ko/・色/shoku/…}

(1)に示すように、日本語の数詞と助数詞の間には語種の一致が見られ、/hito/~/ichi/および、/futa/~/ni/の間の交替が、数量「1」および「2」の異形態として現れる。さらに、(2)のような和語・漢語の交替を伴う助数詞の場合も、数詞と一緒に使われる際に語種の一致を起こす。

(2)　a.【数量＋人】ひと$_{\text{Native}}$・り$_{\text{Native}}$、ふた$_{\text{Native}}$・り$_{\text{Native}}$、さん$_{\text{Sino}}$・にん$_{\text{Sino}}$、よ$_{\text{Sino}}$・にん$_{\text{Sino}}$、…

　　b.【数量＋日】いち$_{\text{Sino}}$・にち$_{\text{Sino}}$、ふつ$_{\text{Native}}$・か$_{\text{Native}}$、…、とお$_{\text{Native}}$・か$_{\text{Native}}$、じゅういち$_{\text{Sino}}$・にち$_{\text{Sino}}$

本発表では、これらの語彙層を横断した異形態の出現パターン（田川 2021, 依田 2022）を、局所的な位置関係に存在する 2 要素間の統語的な一致現象として捉えることを試みる。理論的には、分散形態論の枠組みに従い、後期語彙挿入 (Late Insertion) により、統語構造で計算された素性に対して音形の挿入が行われると仮定する (Halle and Marantz 1993, Marantz 1995)。つまり、統語計算が終了した素性束 (feature bundle) に対して、レキシコンの語彙項目 (Vocabulary Item) の中から、もっとも適した音形 (exponent) を挿入することで、上記の異形態の出現パターンが説明される。本発表の利点は、これらの形態統語的操作が「サイクル」 (Embick 2010, Bobaljik 2012) と呼ばれる局所的な場面ごとに計算されると考えることで、数詞と数量詞との局所的な関係を説明できることである。数詞と数量詞が局所的な関係を結ぶことは、Krifka (1995) によって提案され、近年では Bale and Coon (2014) でも意味論的に議論されている。本発表により、さらに日本語の数詞にもそのような関係があることが形態統語論的に補強される。